それから、韓国の大衆文化が東アジアにおいても特に中国語圏、ベトナム・モンゴルなどの中国文化圏で歓迎されている点も注目される。同じ東アジアにおいても、日本で韓国の大衆文化を見る目と、中国・香港・台湾などが韓国の大衆文化を見る目には温度差のようなものがあり、タイ・マレシア・インドネシアなどの東南アジアでは韓国の大衆文化が中国語圏ほど注目されていない事実を見ても、文化の共通性という要素が働いているように思われる。韓国（朝鮮）は歴史的に中国文化圏に属し、そのような背景が韓国の大衆文化を中国語圏・中国文化圏で受け入れやすくする一つの要因であろう。もちろん経済的・社会発展的差異があって、同じ内容も日本で反応がないものが、中国で反響を呼んだりすることもある。

3．東アジアにおける韓国の大衆文化の展望

これまで東アジアにおける韓国の大衆文化の現状と特徴を調べてみたが、東アジアにおける韓国の大衆文化の今後の展望についても簡単に触れてみたい。東アジアにおける韓国の大衆文化の受容はここ数年のことであり、韓国の大衆文化自体も流動性のあるものであるから今後の展開を簡単には予測しづらい。それでも文化産業の成長による技術とノウハウの蓄積、新世代の俳優・歌手の台頭と活躍、グローバル時代に合わせて海外との積極な交流と合作、政府の積極的な大衆文化振興策など韓国大衆文化が継続して発展する好条件が揃っている。東アジアにおける韓国の大衆文化の現在の人気には幾らか一過性のものがあるが、堅実に発展していけば韓国の大衆文化は東アジアにおいて独自の位置を持ち続けると考えられる。

文永・弘安の役と台風

卯田　強（新潟大学）

蒙古は台風によって撃退されたというのが通説の様である。しかし蒙古軍とはいえ、文永の役では高麗軍が、弘安の役では高麗軍と南宋軍がほとんどであった。現在でも台風は中国の東シナ海沿岸や朝鮮半島に上陸することはめずらしくないし、もちろん当時の人々も海の気象については熟知していたはずである。渡海する軍事作戦上、風を読むことは必須であるが、ほんとうに台風に遭遇したのだろうか。

蒙古襲来の１回目は文永11年10月20日（1274・11・19）であった。晩秋には台風の発生は極めて少なく、発生しても日本を襲うことはめったにない。したがって、900艘といわれる大船団が海を渡るのには最も適した時期であったといえる。おそらく文永の役には台風がやってきたのではなく、蒙古軍が引き上げたのは別の理由だろう。

２回目は弘安４年閏７月１日（1281・8・16）である。前日夜より暴風雨が蒙古の4400艘14万人という途方もない軍団を襲い、船は破れ兵は溺れた。当時の様子を伝える文書から判断するに、あきらかに台風の仕業であろう。大暴風は北もしくは北西よりであったらしいから、このときの台風は、７月30日から７月31日にかけて、南九州を斜めに横断したかあるいは日向灘沿いを北上したかどちらかで、閏７月１日には中国地方西端を横切って日本海へ抜けたのに違いない。

台風の記録を遡ってみると、文永3年8月18日(1266・9・18)、弘長3年8月14日(1263・9・17)、文応元年8月5日（1260・9・11)、正嘉2年8月1日（1258・8・30）などが西日本を襲った大型のものである。1250～60年代は台風の当たり年で、ほぼ9月（新暦）に京都から西国諸国に上陸しているらしい。ひょっとしたら蒙古軍は台風を予想していても、時期的には余裕があると判断していたのかもしれない。

ところで地球温暖化をめぐって、台風活動との関係が論議されている。台風の発生は北西熱帯太平洋の海面水温などと関係しており、地球が温暖化すれば台風の中心気圧と風速が強くなるものの、発生個数が減るという見解が有力である。また、エルニーニョの年には台風の発生が少なくしかもその年の後半にしか発生しないこともわかっている。

ところで文永・弘安の役の頃は、気候の歴史では中世温暖期（Medieval Optimum）といわれる時代の末期にあたり、台風はあまり発生しなかったか、発生しても9月以降だった可能性がある。ところが1281年以降、台風はかなりの頻度で日本に上陸するようになり、しかも時期がだんだん早くなってきている。これは気候が変動し、寒冷化に向かい始めたことが原因と考えられる。ちょうどそのときに弘安の役があったのだろう。

COMMENT

櫛　谷　圭　司（新潟大学）

2度目の蒙古襲来（弘安の役、1281年8月［新暦］）について報告者は次のように推論している。

1）中世温暖期（800～1300ころ）は台風の発生が少なく、発生しても九州来襲は9月に多かった。

2）蒙古はそれを避けて8月に大軍を渡海させたが、13世紀後半は寒冷期に向かう時期にあたり、台風来襲が経験則より早まったため、予想外の暴風に遭遇した。

これは大変おもしろい仮説だが、温暖期に台風の発生時期が遅れることをエルニーニョの年の経験則から説明している点や、特定の年の台風発生時期を気候変動との関連で説明しようとする点は、論理が少々苦しい。また、温暖期に台風発生率が低いのが事実だとしても、最初の襲来（文永の役、1274年11月［新暦］）に失敗したにもかかわらず、蒙古はなぜ14万もの大軍を渡海させるのに3ヶ月早めただけで秋にこだわったのか、という疑問も浮かぶ。

ただし、このように大きなスケールの仮説を正確に検証するのは困難であるため、1）論理に破綻がないか、2）史実や同時期の他の出来事と矛盾がないか、3）さらに大きなスケールの仮説に発展できるか、といった点から妥当性を判断することになろう。ここで、さらに大きなスケールの仮説とは例えば、「寒冷化により食糧不足が発生したことが原因で大陸において民族移動が玉突き的に起こり、高麗人や南宋人が日本海の対岸に活路を見出そうとしていたころ、同じく寒冷化を原因として台風発生パターンが変化し、それを予想し得なかった彼らは渡海に失敗した」、といったようなストーリーである。また、「彼らは強い北西季節風が吹き始める前に大陸へ帰還することを考慮して8月に渡海した（日本に進駐・定住するのが彼らの目的ではなかった)」、と考えることも可能かもしれない。

いずれも想像の域を出ない空想であるが、古代史を環境変化に注目して解釈しようとするこうしたアプローチは、考古学・歴史学と地理学・地質学の専門家による共同研究によってのみ可能となるもので、環日本海学会にふさわしい話題だと思う。